

〈研究ノート〉

釈道空短歌語彙「ひそけさ」「かそけさ」のゆくえ

——第二歌集『春のことぶれ』をめぐって——

中西 洋子

はじめに

折口信夫・釈道空（以後道空）の短歌作品の内、特に全歌集前半に多く用いられる「ひそけさ」「かそけさ」の表現は、この歌人ならではの抒情的な気分をたたえた語彙である。それがどのように誕生するに至ったかについては、それぞれの使用例の持つ意味や用い方の違いなどと合わせて、かつて考えたことがある^{註1}。

要約すれば、先ず二つの語彙が既成の語彙ではなく道空自身の造語であったということ。たとえ第一歌集『海やまのあひだ』所収の「供養塔」において、連作五首の内四首がそれぞれ二首ずつ用いられている点に着目し、その主たる必然性を折口が何日にもわたって続けた民俗探訪の、徒歩による苛酷で孤独な旅の中から見出したものであろうということ。二語の使用例は

この第一歌集と第二歌集『春のことぶれ』にはほぼ集中するが、中でも「供養塔」の場合はまさにこのために生み出された、他のどのような語をもってしても叶わない最適な使用例であった、とする見方である。

そこで本稿を進める便宜上、各歌集にみられる二語の使用例について再度確認しておきたい。

- A 『海やまのあひだ』(22)
- B 『春のことぶれ』(28注1拙稿訂正)
- C 『水の上』(19)
- D 『遠やまひこ』(13)
- E 『天地に宣る』(2)
- F 『倭をぐな』(8)
- G 『私家版自筆歌集』(2)
- H 『短歌拾遺』(3)

(以下、歌集名は記号で呼ぶ)

以上は二語の合計例であり(活用形、既成の類似語も含む)、全体では97例(二語はほぼ同数)であった。この内使用例の最も多いBより次点のAを先の前稿で

採り上げた理由は先述した通りである。従ってB『春のことぶれ』以降、この「ひそけさ」「かそけさ」はどのように用いられていくのか。Aとは異なる様相を見せるのか、そのゆくえにおのずと関心が向かう。そこで本稿ではBの用例に見る作品を様々に検討しながら、それを用いることによって一首の成立にどのような効果をもたらしているかを考えようとするものである。同時に、造語による逡空の抒情の独自性、多様性に触れることで「ひそけさ」「かそけさ」のゆくえを追う意味も合わせ持つ。

一

本歌集は一九三〇年(昭5)梓書房より刊行。一九二五年(大14)三月より一九二九年(昭4)十二月(作者38歳より42歳)までの五〇一首を収める。

この期間は前歌集に引き続き、愛知県北設楽郡の花まつりや長野県下伊那郡新野の雪まつり、能登半島の採訪旅行(2回)土佐、室戸岬など主に採訪目的の旅が目立つ。まつりという民俗的な場における歌の新分野を拓き、逡空独自の世界を創出した。また島木赤彦

の葬儀に出席し、旅先で古泉千樫の死を知るのもこの時期であり多くの秀作を残している。さらに「羽沢の家」「人ごと」「東京詠物集」「門中瑣事」「昭和職人歌」などにみられるように日常身辺に取材した作品が多く、この点にAとの大きな違いが指摘されている。論考では「歌の円寂する時」、「短歌本質成立の時代」、「水の女」、「古代研究」民俗学篇Iおよび国文学篇、といった民俗学的方法による研究の中核をなす充実した成果を得た。

実生活では、國學院大學教授（一九二一年就任）に加えて慶應義塾大学教授を兼任し、生活も安定してきた。没年まで住むことになる品川区大井出石町に転居し、門弟の鈴木金太郎・藤井春洋と同居するなど環境の変化がみられる。作歌活動の上で特筆すべきは「歌の円寂する時」を発表した際、短歌滅亡論として歌壇に大きな反響をまき起こしたことである。また、前歌集で試みた句読法に加えて、様々に配置した句による四行、又は五行からなる分かち書きの表記であり、本歌集の特色でもある点に留意したい。巻頭は序歌「我がまをす／春のことぶれ 聴きたまへ」をもって始ま

る。この国の文学や歌の盛んならんことを願った内容であった。

では、「ひそけし」「かそけし」（活用形、複合名詞、既成の類似語も含む）はどのように用いられているだろうか。

まず、「ひそけし」から（傍線筆者）。

- 1 うつり来しひそかご、ろは、／もりがたし。／
隣の家にあらがふ／聞けば
- 2 のほり来て、／山葬りどに、／額の汗 ひそか
にぬぐひ／わが居たりけり
- 3 よき妻の／よきにつけても 叱る時、／ひそけ
き日々の心は、／をどらむ
- 4 昼早く そばをうたせて／待ちご、ろ／ひそか
なれども、／たのしみにけり
- 5 いまは、／われの心も ひそかになりなむ／と
目をつぶりけむ／牀のうへはも
- 6 深川の 冬木の池に、／青みどろ 浮きてひそ
けき／このゆふべなり
- 7 停車場の人ごみを来て、／なつかしさ。／ひそ

- かに／茶など飲み 戻らむ
- 8 日のうちを／おほかた とぎす家のなかは、／
物の在り処の、／ひそかにあらむ
- 9 人の家に、／ひそかに来たり、ひそかに去るこ
のやすらさは、／人に告げじな
- 10 ひそかの心にて あらむ。／旅にして、／また
知る人を／亡くなしにけり
- 11 朝闇に、／郭公が／近く鳴きにけり。／今日は、
／ひそかの心にてあらむ
- 12 いとまつげて いなむ と思ふ。／昼ふけて／
あるじの臥処は、／ひそまりて居り
- 13 くらきまど、／今日も見てけり。／庭蔵の高処
の臆は、／ひそやかに あり
- 14 見えわたる山々は／みな ひそまれり。／こだ
まかへしの なき／夜なりけり。
- 以上14首提示した。この内、造語「ひそけし」は3
と6の2例、いずれも連体形である。3は小題「鶺鴒の
人々」の中の智納への一首。「鶺鴒」は一九二二年（大

を目的とする会で、大正14年同人誌「くゞひ」を創刊
する。智納もその一人であったようだ。この一連では、
眞、金三、太郎、誠というように総て苗字が省略され、
また「鶺鴒評」には苗字のみの作者名のため、彼の姓
名は不明である。

この頃は新婚だったのか、豊かでなくとも慎ましく
穏やかな日々であったのであろう。「叱る時」には、
本心からではない愛妻に対するいとしさや甘やかな気
分が含まれていて、そういう時にはたしかに弾むよう
な気分を覚えることだろう、と若い智納の気持ちと思
いやって詠われている。「ひそけき日々」は、こうし
た日常の暮らしのふとした挙措をとらえるのに用いら
れた道空独自の人間味の滲む表現であった。

6は「東京詠物集」五四首の内、最初の「木場」に
続く「冬木」と題する二首目の作で、共に冬の叙景歌
である。深川の池に青みどろが浮く夕暮の情景に対し
て用いた連体形であるが、同時にまた池の青みどろの
状態にもひびいていく表現でもあるだろう。前稿で「ひ
そけし」は、ほとんどが自分自身や身近な人々、旅人
(その墓)、などの人間一般、あるいは鳥獣などの生き

物に関わって用いられてきた。その中でこうした観照のゆき届いた叙景歌の場合に用いている例はめづらしく、この点に注目しておきたい。

なお、この二例以外のいわゆる類似の既成語、即ち形容動詞「ひそ（や）かなり」、動詞「ひそまる」、そして語根に名詞を加えたものも提示した。この内1、4、5、10、11は「ひそかご、ろ」、「待ちご、ろ」、「われの心」、「ひそかの心」のように「心」に即した名詞の形である。1については「自歌自註」に、^{注4}

……羽澤の坂の中途の家に引つ越して、間もなく正月を迎へた頃の歌である。(中略) 谷中から羽澤へ移つて来て、年が暮れた。これで静かになると思つてゐたそのひそけさは、自分の心で持ちこたへられない程、隣りの音が聞える。

と述べており、隣の夫婦喧嘩の音による自分の心の状態を表現する場合に用いられていることから理解出来るよう。2、7、9ではそれぞれ「額の汗」ひそかにぬぐひ、「ひそかに(茶など)飲み」、「ひそかに去る」

のように動詞にかかり、8では「物の在り処」の状態を表すのに用いられる。この場合は、人の住む家に関わつての用い方である点を考えに入れる必要があるだろう。また、動詞12は「あるじの臥処」、14は「みえわたる山々」の状態についての、13は「(庭蔵の)高処の牕」の、やはり状態に対して用いられており、8、13、14は総じて辞書が示す用法の内に該当している。つまり、1、4、5、10、11、2、7、9、12、そして8を加える十首は自分の心やその状態、周囲の人々に対して用いられることが指摘できる。十四首全体では、くり返しになるがやはり6の用い方が注目される点であろう。

二

もう一方の「かそけし」をみてみよう。

- 1 かくしつ、／いとゞさびしく かそかに／ます
く／に、思ひえがたくなり行きて、……
- 2 物喰みの／一期病ひに足らへども、かそけく／
心、うごくことあり

- 3 山川のたぎちを見れば、／はろ／くに／満ちわ
かれ行く 音の／かそけさ
- 4 山川の満ちあふれ行く／色見れば、／命かそけ
く／ならむとするも
- 5 かそかなる 生きのなごりを／我は思ふ。／亡
き人も、／よくあらそひにけり
- 6 霞ゐる児湯の高原／行くへなく 出でつ、遊
び／かそけかりけむ
- 7 国遠く／この若き人を 住ましめて、／世のか
そけさを 知れ／と 言いひつる
- 8 山中に／わが見る夢の／あとなさよ。／覺めて
思ふも、／かそけかりけり
- 9 秋にむかふ／山のたつきの かそけきに／こと
しは早く、／電ふりにけり
- 10 息づきて／かそけかりけり。／夏ふかき山の木
蓮子に、／朱さす 見れば
- 11 たぶの木のふる木の 杜に／入りかねて、／
木の間あかるき／かそけさを見つ
- 12 われの世のさびしきに、／ならひ ゆくならし。
／かそけく生きて／教へ子はあり
- 13 遠つ丘脈の梢を わたる／風ならし。／音とし
もなく／聴きのかそけさ
- 14 水脈ほそる／山川の洲の斑ら雪。／かそかに
うごく／ものこそはあれ
- 15 寺の子ども／わが前をさらす 語るなり。／山
のかそけさは、／なれがたきかも
- 16 鳥のこゑ／鐘のひゞきの／身にしみて、かそけ
き山に／めざめけるかも
- 17 歳深き山の／かそけさ。／人をりて、まれにも
の言ふ／声きこえつ、

以上十七首提示した。この内、3、7、11、13、15、17は名詞として、4、6、8、9、10、12、16は形容詞としてそれぞれ用いられている。他に類似語として形容動詞「かそかなり」の用例が1、5、14に見られることも加えておきたい。つまり、名詞、形容詞に共通する語根「かそけ」を持つ造語「かそけし」は17例中13例にのぼるが、先の造語「ひそけし」に見る2例に比して大きな差があることがわかる。これはAでは、造語「ひそけし」「かそけし」の用い方が同数

であったことと大きな違いをみせていることが指摘できる。また、数字の上でみれば「かそけし」はこのBに至ってほぼ定着した傾向にあると言ってもよいだろう。

三

そこで造語を用いた13例の内、数首について述べてみたい。

- 2 物喰^ハみの／一期^{イチゴキヤウ}病^{ヤマ}ひに足らへども、かそけく
／心 うごくことあり
- 4 山川の満ちあふれ行く／色見れば、／命かそけ
く／ならむとするも
- 6 霞^{カスミ}ある児湯^{ニギハヤヒ}の高原／行くへなく 出でつ、遊
び／かそけかりけむ
- 7 国遠く／この若き人を 住ましめて、／世のか
そけさを 知れ／と 言ひつる
- 8 山中に／わが見る夢の／あとなさよ。／覚めて
思ふも、／かそけかりけり
- 9 秋にむかふ／山のたつきの かそけきに／こと

- 10 しは早く、／電^{デン}ふりにけり
息づきて／かそけかりけり。／夏^{ナツ}ふかき山の木
蓮子^{レンシ}に、／朱^{アカ}さす 見れば
- 12 われの世のさびしきに、／ならひ ゆくならし。
／かそけく生きて／教^{シラセ}へ子はあり

あらためてとり出した以上の九首では、それぞれ2「かそけく心うごく」4「命かそけく」、6「出でつ、遊びかそけかりけむ」、7「世のかそけさを」、8「覚めて思ふも、かそけかりけり」9「山のたつきのかそけきに」、10「息づきてかそけかりけり」、12「かそけく生きて」などのように、心、命、遊び、世、覚めて思ふ、山のたつき、息づきて、生きて、と自分や周囲、訪れた山の人々の生活に深く関わって用いられている点に特色が見られる。

2は「冬立つ厨」十一首中の一つ。道空が非常な健康家であったことはよく知られている。連作の最後には「胃袋に満たば、／嘔^{ナゲ}りて また喰はむ。／あき足らふ時の／あまり すべなさ」と詠う一首もあって、ほとんど常軌を逸した執着ぶりといってよい。2では

そうした二期の病、一生治らぬ病気に満足している上句に対しての、心の動きに用いた「かそけく」をどのようにとらえればよいだろう。

『道空百歌輪講^注』では各々次のように述べる。

下句は逆の心の動き（一ノ関忠人）

「ひそけし」「かそけし」は初期に多用した「さびし」「かなし」の意味合いを、より自在に拡大するために採用——、（中略）ここでは、いわば孤独感のようなものを表している（奈良橋善司）

味覚と満腹感を満たしたその充足の時に、そこはかとなく兆すところ動き。何とはなく生じてくる
 ころの飢渴感（畠山英治）

上句の食への執拗さが一転することによって、悲しみとも愛しみともつかぬ複雑な思いが、きわめて微かなものとして、客観性を持って、浮かび上がってくる（成瀬有）

一生直らない病気に、食って食って満腹するけれども、ひっそりと心が焦れることもある（藤井貞和）

などのとらえ方がされている。それぞれのとらえ方の中で、ここでは畠山、成瀬の見方に近く、満腹感の後の孤独感、とまではないかかない微かに生じる言いようのない心の複雑な動き、ととらえたい。特に挽歌的要素を見ようとしなくともよいのではなからうか。「かそけし」にはこうした微妙で複雑な一面をもつことを見がせないのである。

8は長野県飛騨山脈南部の上高地を旅した折の歌である。「自歌自註^注」には、

河童橋のあたりから見ると、額の上に槍ヶ岳が見える。さういふ鋭い山の幻想を胸にもつて寝ても、一向とりとめたものを見る事もない。その物足らぬ心で、眼があいてから暫らく考へてゐる心のうちにあるものも、何の刺戟もない静かな、遙かな、あるかないかの印象に過ぎない。今考へると、この「かそけかりけり」が、おちついているほかの語の字から浮いてゐるやうな気がする。（中略）
 だが、はかなかりけりよりははい、であらう。

こうした部分から、結句を選ぶにあたってかなり難渋したことが伝わってくる。内容はとりとめなく複雑で微妙である。また、「見た夢を思ひ返してみると、唯快い印象が残つてゐる。その心深く、耐へ難いやうなほかないものを感じる。我々は、そのかそけさやしづけさを喜びながら、それに耐へることが出来るかどうかを、危ぶまずにはゐられないのである。」ともあつて、ますます心の内奥の微妙な揺らぎを覚えずにはいられない。「かそけかりけり」の表現には、Aでは見られなかつたこうしたきわめて複雑で微妙な心の内奥の揺らぎを含むことも知っておきたい。

9は「上州河原湯」十首の中の一。首。「自歌自註」には、河原湯は吾孀川を溯つて草津へ向かう途中の村で、この頃はどこの農村も疲弊していたとある。

「山のたつき」といふのは、山家の生活の手段、「秋にむかふ」は、まだ十分田がみのらない時分で、四季の上から言へば、秋になつてゐるのである。こゝの「かそけきに」は、特殊な使ひ方をしてゐるが、決つてもらへると思ふし、又この戦争以前

は、そんな経験を繰り返してをつたので、雑念をさしはさむ隙がないほど、考えがむなしくなるのである。

民俗探訪の旅には、このような秋の収穫のおほつかない寒村を道空は幾つも見てきたことであろう。村の子らは空腹を満たそうとして、田の中に飛ぶ蝗やばつたを手づかみで食べていると詠う一首も見られる。「かそけきに」はそうした明日の食糧さえ危うい生活の窮乏状態に対して用いられてもいたのだった。

一方次の七首、

- 2 山川のたぎちを見れば、／はろ／くに／満ちわかれ行く 音の／かそけさ
- 9 たぶの木ふる木の 杜に／入りかねて、／木の間あかるき／かそけさを見つ
- 11 遠つ丘脈の梢を わたる／風ならし。／音としもなく／聴きのかそけさ
- 12 水脈ほそる／山川の洲の斑ら雪。／かそかに

- うごく／ものこそはあれ
- 13 寺の子ども／わが前をさらず 語るなり。／山のかそけさは、／なれがたきかも
- 14 鳥のこゑ／鐘のひびきの／身にしてみても、かそけさ山に／めざめけるかも
- 15 歳深き山の／かそけさ。／人をりて、まれにもの言ふ／声きこえつ、
- 2 「激ちの音のかそけさ」、9 「木の間あかるきかそけさ」、11 「聴きのかそけさ」、12 「かそかにうごく」、13 「山のかそけさ」、14 「かそけき山」、15 「山のかそけさ」のように、木の間の状態や聞こえる音、山の状態について用いられていることがわかる。この内、13、14、15は子どもらや鳥の声、山の人々の声に関わって用いられているのを見ると、先の九首の範囲に加えてよいだろう。また、2は恩師である三矢重松の、重病から死に至る連作十四首の最初の歌である。この一首だけ取りだして読めば山川の激流を詠った情景描写であり、二首目は先に示した4「山川の満ちあふれ行く色みれば、命かそけくならむとするも」が続く。

いづれも気分が緊迫し調子の張った作品群である。「自歌自註」^註によれば、その亡くなる直前に作ったものといい、

堂ヶ島の宿の眼の前を、早川の水が止る間なく流れてゐた。激して流れる山川の水。それが、水が豊かに大きなうねりを作つて流れてゆくが、而も眼の及ぶ處までさうして流れて行つて、遠くの流れが岐れるのか、音がしんと身に沁むやうに細く聞える。あの時はもつと敬虔な心で、先生を考えながら、先生の原稿を書き直してゐた。(中略)私の長く仕えて来た先生は、今は物にまぎれてみえなくならうとしてゐられる。山川に向へば、この夕の光線が水に当つて、川水の青みが深くなつて来てゐる。その水のおもてから眼を離すまいとしてゐる。

この自註文は少し説き過ぎたかもしれないと、自ら断っているが、山川の激ちを見つめ続けるのは、今まさに消えかかろうとしている師の命そのものではない

かったか。「眼を離せば、永久に見失ふもの、如く」とも述べている。気性の激しさを持った師であったという。その命の象徴としての激しきであつたと受け取りたい。「かそけさ」は、その激しきが遠く分かれて流れていく時に聞こえる音に対して用いられたのである。先に引用した『道空百歌輪講^{注9}』では、「この一首のみでは挽歌的要素ははつきりしない。叙景の歌としてみるとどうか。やや強引で不安定な印象をもつ。「かそけさ」にも、道空の力わざを見る」（一ノ関）、「この歌には分かりにくさがある。「たぎちを見れば、「音の／かそけさ」の世界にうまく読者として入り込めないので。（略）さらに、下句は暗示を目的として作られたのではなかつたかなども。単なる叙景とは思えない。」（畠山）、「一首の読みは作歌時、つまり病床の師を思いながら、その頭影に苦悩していたことを大事にすべきで、一ノ関、畠山評もそこから醸し出された興味だろう。「音の／かそけさ」は、いわば師弟の長いかかわりの象徴といつていいだろう。」（奈良橋）、さらに山川の「たぎち」から、三矢の気性の激しさを推測する藤井評も加えておきたい。

つまり連作の中では、序の役目を果たすような叙景歌ではなかつた。「かそけさ」は師の命の細りゆく表現として用いられたのであつたと理解する必要がある。ここでは「音のかそけさ」であり、二首目では「命のかそけさ」であつた。

こうした歌の背景を知った上で鑑賞すると、叙景歌も単なる叙景歌として通り過ぎる訳にはいなくなってくるだろう。「道空から学んだ一つに、叙景を押し進めてゆくと、やがては抒情気分が連綿するとの短歌観がある」と成瀬評にも記す。以下に続く連作に先だつて掲げた、抒情性を帯びた象徴的な一首であつたととらえたい。従つて2も先の心の内奥を示そうとする9首の範囲に加えて10首と考えることにしよう。

9は「氣多はふりの家」連作十五首の一首で、後に養子となる愛弟子藤井春洋の実家を訪れた時のものである。たぶの木きの杜もりはすぐ近くの氣多大社（能登一ノ宮）の杜の意、その鬱蒼と茂る木の間の明るさの状態に対して用いた表現である。一連の特徴はほとんど氣多の村の情景描写で占められている点にあり、9もその一つと言える。「自歌自註^{注10}」には「此頃私の記念著

述になつた『古代研究』を、つゞけて著してゐる時分で、氣多の社に關する興味が、とりわけ古代風に現れてゐる」とあつて、そうした氣分を参考にして鑑賞すべきなのだろう。11は三河北設楽の山村に伝わる雪まつりの探訪に訪れた時の連作「雪まつり」七首中の一首。ここでは風の音について用いており、9と同じく雪の降る山の情景描写で占められた一連である。

また12は「別所」四首を置いて再び連作「雪まつり」十一首中の一首。祭りの夜の村をめぐる山々、山峡、山川など多くその情景描写に占められる。ここでいう「かそかに」を受ける「うごくもの」とは何か。山川の洲の斑ら雪の中にそうした氣配を感じ取つたのであるうか、不明である。この一連には「鬼の子の いでつゝ／遊ぶ 音聞ゆ。／設楽の山の／白雪の うへに」という、まつりに登場する鬼の子を詠つた一首を含む。これは後に続く「花まつり」（北設楽の村々の霜月祭）十五首と共に、この歌集の中心をなす歌群であることをつけ加えておきたい。折口が足で歩いた民俗探訪の、研究と作歌における新境地の成果がここにあつた。要するに9、11、12は人事ではなく情景描写を含む叙景

歌であると言えよう。

つまり「かそけし」とそれに類似して用いられた十首の内、十三首が自分自身を含めた人間、生き物に關つたもの、残る四首は叙景歌であつた。なお、前稿Aでは音に關わる用い方が十一首中一例あるが、この点はBもほぼ変わらないと言つてよい。

以上、B『春のことぶれ』における「ひそけし」「かそけし」（類似語も含む）の用例を検討してきた。

即ち「ひそけし」では造語の用例が2例であること。類似語を含めた全体14例では、10例が自分自身の心やその状態、および周囲の人々にたいして用いられていることが指摘できる。ただし、この中では6の用い方に注目する必要があることはすでに述べた。

「かそけし」では造語は17例中13例にのほり、「ひそけし」にみる2例とは大きな差があること。これはAでは造語が二語ともにその用い方がほぼ同数であつたことと、やはり大きな違いをみせる点が指摘できよう。そして、「かそけし」はBに至つてほぼ定着した傾向にあるとみられる。さらにまた「かそけし」は、作者

自身のもつきわめて複雑で微妙な心の内奥の揺れを表現しようとする語として用いられ、前稿で示したAとは異なった現時点での、幅の広さと深さをもつ内容の表現に至ったと考えられるのである。叙景歌とみえてそこに内包されるのは、抒情性の投影であったことも指摘した通りである。

道空にとっては歌境の深まりに通じる表現上の収穫であったと言える。なお、C以下のゆくえについては他の機会に触れるつもりである。それとともに総括として先行説も視野に入れながら、全歌集における「ひそけさ」「かそけさ」のもつ意義を考えてみたい。

〔注〕

1 中西洋子「釈道空短歌語彙『ひそけさ』『かそけさ』の誕生―『海やまのあひだ』所収「供養塔」を中心に―」『日本文化研究』第6号國學院大學栃木短期大学日本文化学科 発行二〇二一年12月

2 千勝重次・岡野弘彦共著『釈道空』近代短歌・人と作品4の内、千勝重次担当「作家研究篇」桜楓社出版一

九六一年11月

3 折口信夫著・岡野弘彦編『釈道空全歌集』角川ソフィア文庫 KADOKAWA二〇一六年6月

4 「鶉歌評」「くゞひの人びと」「折口信夫全集」第28巻

5 『折口信夫全歌集』第26巻「自歌自註」

6 『道空百歌輪講Ⅰ―道空短歌の読み方』歌誌「白鳥」別冊 編集発行人成瀬有二〇〇六年3月

7 注5に同

8 注5に同

9 注6に同

10 注5に同

*参考 注3所収著者略年譜『折口信夫手帖』

國學院大學折口信夫古代研究所編一九八七年10月

②の『春のことぶれ』の条

*引用した資料は、仮名遣いは旧かなのままとし、旧漢字は常用漢字に改めた。